

目取真俊の不敬表現

——血液を献げることへの抗い——

友田義行

序

目取真俊の小説「平和通りと名付けられた街を歩いて」（以下「平和通り」と略称する）は、『新沖縄文学』（1986年12月冬季号）に〈第12回「新沖縄文学賞」〉受賞作として発表された¹⁾。その後、『沖縄文学全集』²⁾ および短篇集『平和通りと名付けられた街を歩いて』³⁾ に収められている。

作品の舞台は1983年7月中旬の沖縄県那覇市に設定されており、この時期に挙行された皇太子夫妻（当時）による沖縄訪問と、それに対する街の反応が描かれている。視点人物はしばしば移り変わるが、特にカジユと呼ばれる小学生の一義とその祖母であるウタの行動は、読者を日本近現代文学における例外的な局面へと導く。それは、目の前を通過しようとする皇太子夫妻のもとへと駆け寄り、接触の直前まで肉薄するというものである。

同時代の皇族を登場させ、直接的な接近描写を為すという、タブーを犯す小説。渡部直己は『不敬文学論序説』⁴⁾ でこうしたテキストを「不敬文学」と呼んだが、「平和通り」は昭和がやがて終わろうとする時期にきわめて意識的に創作された不敬文学である。近現代文学にしばしば召喚されながらも具体的な姿が描写されることのほとんどない同時代皇族を、目取真はどのような表現で捉えたのか。また、なぜこの時期に沖縄を舞台にした不敬文学が書かれなければならなかったのか。言葉を失いつつあるウタがとった無謀とも映る行為の背景を、小説とそこに折り畳まれた歴史とを往還して考察する。

1. 皇太子夫妻の沖縄訪問

1983年7月12日、特別便で沖縄空港に降り立った皇太子と皇太子妃は、まず摩文仁平和記念公園やひめゆりの塔など島の南部戦跡を巡り、その翌日には血液センターの視察に続いて「献血運動推進全国大会」に出席し、二日間の日程を終えて帰路に着いた。最初に戦跡を巡礼したのは、主に戦禍を通じて醸成された天皇（制）に対する沖縄県民の反発への配慮であった。だが、融和のための場と想定された戦跡は、皇族に対する抗議活動のアリーナでもあった。小説「平和通り」は、1983年の皇太子来沖が、その8年前に起きた事件を人々に想起させたことに言及している。たとえば、次に掲げる警察官の台詞である。

ほら前の海洋博の時に、ひめゆりの塔で皇太子殿下と美智子妃殿下に火炎ビンが投げられて、やがて大変しよったことがありましたでしょう。

ここで引き合いに出されているのは、1975年に開催された沖縄海洋博の開会式出席のために初めて沖縄を訪れた皇太子夫妻を狙った襲撃事件である。「平和通り」は作中現在の1983年だけでなく、1975年の記憶も重ね合わせ、二回の皇太子訪沖に反応した小説なのである⁵⁾。それぞれの時期に沖縄で何が起きていたのか、当時の報道を精査しつつ、不敬表現に及ぶ小説との関連を探りたい。

1975年7月17日、ひめゆりの塔に献花し、説明役の話に耳を傾けていた皇太子夫妻に向かって、傍らの壕から飛び出した二人組の男が火炎ビンを投げつけた。火炎ビンは献花台の石壁裏に当たり、少し間を置いて燃え上がった。意表を突く白色テロではあったが、この事件が起きる以前より、沖縄では皇太子の訪問に反対する声上がり、襲撃の危険性も報じられていた。5月には沖縄県原水協が皇太子来沖反対を決定し、以後沖教組や全軍労など各種民主団体および革新団体が次々に非協力や反対の姿勢を表明した。また、6月18日には摩文仁丘の霊拝所一带に「皇太子来沖阻止」「天皇糾弾」などの文字が赤ペンキで書き付けられる事件も起きており、皇太子だけでなく天皇制にまで抗議の対象は広まりを見せていた。さらに、6月25日には釜ヶ崎共闘会議幹部が沖縄市内の米軍基地前で焼身自殺を遂げた。「皇太子来沖阻止、朝鮮革命戦争に対する反革命出撃基地粉碎」を掲げた遺書の冒頭には、「皇太子暗殺を企てるも、彼我の情勢から客観的に不可能となった。したがって死をかけた闘争ではなく、死をもって抗議する」との文言が書き付けられており、皇太子暗殺計画の実在が明るみになったのである⁶⁾。

こうした抗議行動と、「本土並み」に皇族を迎え入れるべく皇太子夫妻を歓迎する声とが交錯するなか、那覇市には厳重な警備が敷かれた。沖縄県警約1300名に本土からの応援約2400名を加え、警備陣の数は総勢約3800名にのぼった。完全武装した警官が市街地で1メートル間隔、山間部でも1キロ前後の距離で立つ、沖縄県下では史上空前の警備体制であった。また、防犯体制が強められる中で、予防拘束の実態も明らかにされていく。県内に住む精神障害の疑いのある人物108名を県警がリストアップし、県環境保健部予防課に彼らの精神鑑定および強制収容などの措置を求めていたのである⁷⁾。後述するように、こうした非常警備は1983年にも繰り返されることになる。

しかし、厳戒態勢を嘲笑うかのように、1975年には皇太子夫妻に向けて火炎ビンが投げられるという、警備当局にとっては痛恨の不祥事が起きてしまった。しかも、全国紙の報道が専ら「ひめゆりの塔事件」に集中した陰で、そのわずか十数分前にも糸満市を移動する皇太子の車列に火炎ビンや角材が投下される事件が起きていた。

襲撃者たちが厳重な警備網をかいくぐることができた要因を探ると、彼らと警備陣そして皇族をめぐる隠微な政治力学が浮き彫りになる。糸満市の事件では、皇太子夫妻が通過するコース沿いにあった白銀病院に、仮病の男二人が前日から入院していた。彼らは警備の手の届かない病院の三階ベランダから、スパナや箒などさまざまな「凶器」を投下し得たのである⁸⁾。一方ひめゆりの塔では、慰霊碑脇にある壕の中に一週間前から二人の男が潜伏していた。皇太子夫妻の参拝が予定されていた場所であるにも関わらず、彼らを事前に発見できなかった警備担当者は、事件後の記者会見で次のように釈明している。まず、ひめゆりの塔周辺は事前に調査したが、壕の外側から懐中電灯を照らして調べる程度にとどめた。なぜなら、ひめゆりの塔は数ある沖縄戦の悲劇の象徴であり、県民感情からいっても洞窟内の検索は問題があると判断したというのだ⁹⁾。

病院と礼拝所という警備の死角。警備当局は、生命と死が隣り合わせるこの二つの聖域・霊域の、神聖さ・不可侵性を強調することで、県民感情への配慮をも表明したのである。この論理によって襲撃者は聖域・霊域に立ち入る不敬を働いた“罰当たり者”とされ、沖縄戦犠牲者の遺族からも非難されることになった。皇族を狙った者たちはあくまで例外的な過激派であり、沖縄の内部にあっても容認しがたい道徳的腐敗者であると烙印を押されたのである。

襲撃者たちはいずれも現行犯逮捕されたが、後に展開される裁判でも不敬にまつわる奇妙な手続きがつきまとった。たとえば、「ひめゆりの塔事件」の裁判では、逮捕時の「暴力行為等処罰に関する法律違反」「傷害罪」「公務執行妨害」が、起訴の際には削除された。また、「礼拝所不敬罪」に関しては、“礼拝行為”ではなく礼拝所という“場所”に対する不敬に関わる「第一項」のみが適用された。当事者も分析しているように、前者からは皇太子ら皇室関係者を法廷の場に召喚し、被告や弁護団らの反対尋問に答える機会を回避する意図が透けて見える。また、後者は皇太子夫妻への糾弾行為を「ひめゆりの霊への冒瀆」にすり替え、県民の内部に亀裂を生じさせる効果をもった。さらに、「礼拝所不敬罪第二項」が適用されなかったことは、不敬の対象を「慰霊碑」に絞り、「皇太子の礼拝」を欠落させることで、やはり法廷の場に皇族を引き出さないでおこうとする意図が伺える¹⁰⁾。

しかし、8年後に皇太子夫妻が再びこの地を訪れた際、その神聖な場所は徹底的な調査を受けることになる¹¹⁾。その成果もあってか、二度目の来沖は彼らにとって平穏無事なものに終わった。昭和天皇の高齢化と疾病を背景に、この8年間でもう間もなく天皇となることが公然と確信された皇太子の聖性は、病院や慰霊碑のそれに優先されるものになったというべきか。

1975年の事件はまた、結果的には皇室への反発を緩める出来事ともなった。事件の瞬間を伝える報道写真は、炎を前にしてひるみ狼狽えるという極めて人間的な反応を示す夫妻の姿を捉えており¹²⁾、美智子妃が悲鳴を上げたとのスキャンダルも持ち上がったが、一方で二人が自分たちの身よりも周囲の人々を気遣ったという美談が広められた¹³⁾。また、皇太子はひるむどころか炎を見据え、周囲の人々を慮るあまり警備陣に押し戻されてようやく車に避難したとも伝えられた¹⁴⁾。炎天下で流れる汗を拭おうともせずに慰霊碑を礼拝した皇太子は、ここでも誠実な人柄を披露している。さらに、事件当日の夜には、「共に平和を追求しよう」という「異例の談話」が発表され、県民・国民の感動をあおり立てた¹⁵⁾。火炎瓶事件の対処は、ニューファミリーの象徴でもあった皇太子像に、威厳のある帝王像の要素を加味する絶好の機会でもあったのである。一人の人間が次の天皇制を担うに足る存在へと演出されていった形跡が辿られる。

一連の出来事を経て、皇太子夫妻は1983年に沖縄を再訪する。今度も総勢2900名あまりの警備陣を引き連れての来沖であった。

小説「平和通り」が描き出すのは、皇太子たちを守るための警備によって破壊されていく市民の日常生活である。少年カジユの一家は、祖母ウタを外出させないように警備当局から執拗な警告を受ける。かつて平和通りで魚売りを営み、戦争で家族を失った同業の女性たちから敬愛され、彼女たちと肩を寄せ合って生きてきたウタは、今は認知症を患っており、自らの排泄物が付いた手で売り物を触り歩くことから、商店街の仲間をも困惑させている。警察は学校帰りのカジユにつきまったり、職場の上司を通じてカジユの父正安に圧力をかけたりし、皇太子夫妻が来沖する日はウタを自宅に軟禁するよう迫る。

当時、自由法曹団沖縄支部は、「皇太子来沖にともなう過剰警備に対する抗議声明」¹⁶⁾を発表した。住民から支部には次のような報告が寄せられたという。——皇太子の通過する沿道の全世帯・事業所等に対し、警備当局が家族構成・勤務先などの身元調査を実施している。——皇太子の通過する沿道・ビルについて、二階以上の窓は開放し、カーテンなどはかけないよう指示があった。——民有墓地の草刈り清掃をするよう指示。——各農家に沿道のキビの下葉を取るようにとの口頭での協力要請。——沿道の鮮魚店に対し、皇太子通過の当日は、人目につかないような包丁・刃物を厳重に管理するよう要請。また、農家に対しては、カマやクワを管理するよう指示（事実上の休業・休耕の強制）。——沿道の空き瓶回収業者に対し、空き瓶積み場所の移動を指示。——ひめゆりの塔などでの花売り行為の禁止、売店への事実上の閉店要請、摩文仁丘・平和公園への事実上の立入禁止要請。——皇太子の宿舍の全従業員への検便が実施されたほか、招待者の身元調査・身上調査を本人ばかりでなく親類縁者にまで拡大して実施。——このうち、住民の身元調査や商売道具の管理要請がどのように市民生活を蝕んでいったかについては、小説「平和通り」で具体的に描かれている。

「平和通り」はさらに、沿道の植物の伐採や、風景を一変させるほどの警備陣の様子も捉えている。実際に地元紙でも、保安目的で刈りとられたハイビスカスの木や、半強制的に営業停止させられた売店の写真が掲載された¹⁷⁾。さらに、このときも1975年と同じく警備当局から「精神障害者は表に出すな」という指示が出されたことを、目取真俊はエッセイで記している¹⁸⁾。街を「徘徊」するウタの外出を禁じるのも、こうした警備の一端と考えられる。認知症が秩序紊乱の可能性を秘めていることに、官憲は気付いていたとも言えよう。

8年前に続いて繰り返された過剰警備の風景、そして現実には無事に沖縄を後にした皇太子夫妻。「平和通り」は、住民の人権を犠牲にした警備で「平穏」に終わったこの旅に別の結末を与えようとするが、その前に皇太子の来沖目的をもう少し辿りつつ、同時にもう一つの重要なモチーフに着目しながら、この小説の批判性を析出したい。

2. 血液とジェンダー

小説「平和通り」における皇太子夫妻の主な来沖目的は、1983年7月13日に那覇市民会館で開催された「第19回献血運動推進全国大会」への出席であった。この大会は厚生省と都道府県および日本赤十字社の協賛で、1965年から毎年「愛の血液助け合い運動」の一環として開催されているものである。当初の目的は、1964年の閣議決定に基づいて、献血による保存血液の確保と売血の追放を目指すことであった。第1回は東京都厚生会館ホール、第2回は名古屋市愛知文化講堂で開かれ、以下大阪、福岡、秋田と各都道府県を巡回していく。毎回皇族が臨席しており、秩父宮妃、高松宮妃、常陸宮妃、三笠宮妃らが交代で参加した。彼らは日本赤十字社の名誉副総裁の地位にあり、大会ごとに「励ましのことば」を述べている。

日本赤十字社と皇室との関係は深く、1947年には皇后が名誉総裁に着任している。皇后は1960年8月12日に、宮内庁長官を通じて日本赤十字社社長に献血運動の和歌二首を伝達しており、これに曲を付けた「献血の歌」まで作られた¹⁹⁾。大会では、皇太子夫妻が出席するようになるまでほぼ毎回この歌が合唱された（皇太子夫妻が初参加した第10回は「君が代」斉唱）。



『沖縄タイムス』1983年7月4日全面広告



『琉球新報』1983年7月11日夕刊

皇后の例に顕著なように、赤十字と皇室、特に献血と皇室の関わりは、主に妃が中心的な役割を担っている。大会への臨席者も当初は各宮家の妃のみであった。この中にあって、皇太子だけが男性皇族として妻とともに参加を続けるようになる。第12回以降は皇太子夫妻の列席が恒例化し、1983年の来沖もこの大会への出席が主目的とされた。結果的に、常に妻と連れ添う次期天皇の姿勢が、訪沖の口実となったのである。

ところで、「献血」という言葉が使われ始めたのは、日本が高度経済成長期に入ってからのことである。『血液事業のあゆみ』（前掲）によると、敗戦後の日本で新聞紙上に献血の文字を確認できるのは1959年以降のことであり、日本赤十字社が正式に広く使用し始めたのは1960年の「赤十字愛の献血運動」からである。しかし、この言葉が初めて使われたのは、戦時下においてであった。最も古い使用例は、1938年10月10日付『報知新聞』の見出し「軍人医学に一画期 戦場勇士へ献血近し」である。当時の輸血は、その場で採血した血をすぐに注入する枕元輸血や、供血者の動脈と患者の静脈を直接的につなぐ方法や、死体から採血した血液を注入するといった段階にあったが、記事によるとこの年はじめて熊本から満州新京への血液輸送実験が行われ、重症患者への輸血に成功している。

輸血用血液を長期間保存する技術は、戦場で傷ついた兵士たちに、戦うエネルギーである血液を送り届けるために求められた。血液を献げる役割を期待されたのは銃後の人々、特に高血圧の人と、生理的に回復が早いとされた女性たちであった²⁰⁾。1943年には「献血報国協会」が設立され、篤志家によって献納された血液が血液製剤の研究に使用されている²¹⁾。「銃後の女性の血液が第一線の兵士の命を救う」というキャッチフレーズも用いられ、採血した血液から血漿だけを取り、凍結真空乾燥したものを前線へと送る事業が実施されていた²²⁾。戦前に女性を中心となって兵士のために血液を献げていたという歴史事実は、献血という言葉が軍国主義を支える報国の精神に関わる語であった側面を示している。

戦後、日本赤十字社が血液事業を開始したのは1952年のことである。当初は預血・返血と無償供血により血液を確保していたが、1955年頃から供血者（売血者）の固定化と供血地域の偏在が問題視されるようになる。同時に、健康に問題を抱えた常習売血者の血液を大量に輸血したことから血清肝炎に感染する患者が続出し、売血血液は「黄色い血」と恐れられるようになった。1962年になると早稲田大学赤十字学生奉仕団による商業血液銀行への潜入ルポが発表され、マスコミも「売血追放キャンペーン」を大々的に展開し始める²³⁾。

そして、1964年3月24日にライシャワー米国駐日大使が暴漢に襲われて負傷し、治療のための輸血によって血清肝炎に感染する事件が発生した。これを受け、売血制度から献血制度への転回が国家的急務とされた。その翌年、「献血運動推進全国大会」に臨席した秩父宮妃は、今日の血液事業の状況を「まことに遺憾なことで、私ども恥しいことだと思っております」と強い言葉で問題化し、「献血思想の普及および献血組織の確立が全国津々浦々にまで行きわたり、国民みんながこぞって献血し、患者の方々が安心して輸血をうけられるように」と宣った²⁴⁾。以後、皇后を名誉総裁に戴く日本赤十字社は、善意・優しさ・人道主義・社会奉仕・相互扶助・博愛の精神を掲げ、献血運動を推し進めていくのである²⁵⁾。皇室は戦後も国民の生命・身体に介入し続けている。

献血をめぐるこうした歴史は「平和通り」にも反映されている。小説の後半で、ウタは皇太子夫妻の乗った車のドアに体当たりし、車窓を平手で叩く。その動機は直接的には示されないが、戦争中に洞窟で幼い長男義明を亡くした痛切な無念と怨恨が彼女を突き動かしたことが、失われつつあるウタの言葉やフミの回想から了解される²⁶⁾。1975年の皇太子襲撃がいずれも男たちによる戦闘だったのに対し²⁷⁾、目立った直接行動のなかった1983年を仮構するこの小説では、戦争で子を奪われた女性が正面から皇族に挑みかかるのである。ウタの次男正安（カジュの父）は、皇太子来沖を報じる新聞記事を見て、「戦争であれだけ血を流させておいて、何が献血大会か」と吐き捨てる²⁸⁾。皇太子に強い嫌悪を抱き反発する正安はしかし、警備当局からの要請に屈服し、何の反対行動も起こせなければかりか、ウタを部屋に軟禁する決断を下す。ウタは皇族来沖を黙認する男たちに同調せず、戦争で血を流させた責任体系の頂点にある、天皇制の次代を担う一人の男と、その子を産むことを義務づけられた女に肉薄するのである。

皇太子来沖の道筋を作った赤十字社の背後には、皇太子夫妻だけでなく、天皇、そして皇后の姿がある。「平和通り」でウタが見せた戦いはいわば女の戦いであり、息子の血と命をめぐる母と女性皇族との対決でもあるのだ。

3. 召喚と隔絶の不敬文学

小学生のカジュは、恐らく皇太子や天皇制の意味を吟味したことも、それらに対する自分の政治的姿勢を決定しようとしたこともなかったはずだ。カジュにとって皇太子夫妻は、大好きなおば一の自由を奪う力の元凶に他ならない。カジュは復讐を誓い、彼らの顔に唾を吐きかけることを企てる。読者はカジュとともにその現場に立ち会うことになる。警備陣に囲まれて眼前に現われた皇太子夫妻の姿は、次のように描かれる。

後部座席の二人の顔は、ハツのとっている婦人雑誌のグラビア写真のそれよりもはるかに老け、鮮度の失われた烏賊のように青白くむくんだ頬に笑い皺が寄り、土偶のように腫れぼったい脛の間の細い目から弱々しい光が漏れていた。

写真には表れない容貌の細部まで、少年の眼は接近し拡大して見せる。「平和通り」は同時代の皇族を作中に導入し、しかもその姿を直接描写する。皇族に限りなく近づき、それを恣に切り裂くこと。描写のもつ接近と分断の機能が向けられるとき、隠すことで醸成・保持される皇族の聖性は危機にさらされる。小説は肝心のものを直写するばかりか、それが何ら隠すに値しないものであること自体をも暴露し、陵辱するのだ²⁹⁾。

だが、「平和通り」が持つ不敬性は、単なる直接描写だけに留まらない。カジユを突き飛ばし、車窓一枚隔てた位置にまで皇太子夫妻へ肉薄したウタは、意識的か否かは判然としないが、そこに大便を叩き付けさえする。

カジユは、笑い顔をつくることも忘れて、怯えたようにウタを見ている二人の顔の前に、二つの黄褐色の手形があるのに気付いた。それは二人の頬にべったりと張り付いたようだった。

神道的な清浄無垢とはかけ離れた、汚穢を彩る罵倒語の即物的表現は、皇室の権威を貶めるだけでなく、皇太子来沖に対するウタの回答でもある。火炎ビンを投げつけられたときも毅然とした態度を取ったと伝えられる二人は、ここでは怯えたようにウタを見ることしかできない。文字通り「顔に泥を塗られる」状況に陥る³⁰⁾。

沖縄の少なからぬ民衆が皇太子訪問に反発した背景には、琉球処分、沖縄戦、天皇メッセージ、米軍基地と自衛隊付の本土復帰と連続する歴史がある。そのうえで「平和通り」が焦点を絞るのは、天皇の名において行われた沖縄戦と、そこで家族を奪われた母の姿である。敗戦から40年近くを経て来沖した島を覆う警備陣や、閉ざされた場所へと自分を押し込む暴力は、ウタに戦時下の記憶を揺り起こす³¹⁾。ウタにとって皇太子とその警備は、「戦後」の現在を圧倒するほどの強度で「戦場」の記憶を喚起する呼び水となったのだ³²⁾。

ウタは特定の団体や政党に属していたわけでもないし、そうした共同体成員の多数を占めた男性でもなかった。火炎ビンや角材を投げるわけでもなく、鍬も鎌も包丁も手にしなかった。戦争を体験し「戦後」を生きてきた一人の女性が、様々な抗議コードから逸脱した行動で、皇族への態度を表明したのである。東京裁判以後も決して法廷に召喚されず、戦争責任を曖昧にしたまま、警備陣を引き連れ各地を巡る天皇の血族に対峙するとき、その方法が奇襲的な場外乱闘になるのは必定である。

さらに、目取真俊の不敬表現には別の側面がある。それは、接近とは逆のベクトルを持つ、「隔絶の不敬表現」とも言うべき技法である。すなわち、目取真作品のある特徴的な表現系列から、皇太子夫妻を排除する仕掛けである。

西成彦は、目取真俊がぶつかりあう筋肉を通した歴史の探究に取り組もうとしていると指摘している³³⁾。そのために目取真は、人間の感覚を動物にあてはめる擬人法だけでなく、その逆に、

動物的な感触を人間にあてはめた描写を意識的に多用している。「平和通り」から例を挙げると、「触角の折れた蟻のように頭を斜めにして走」る癖のあるカジユは、「警戒心に満ちた小動物のよう」でもあり、「水鳥の嘴から逃げる小魚のように素速く」動く。沖縄戦下の洞窟で絶命した義明は「魚のように口をバクバクさせて」外気をむさぼっていたが、やがて「生まれたばかりの雛鳥の目のように腫れ上がった脛」のせいで視覚を奪われていく。そして「外敵に襲われた小魚がサンゴの茂みに潜り込んで身を守るように」して生きてきた平和通りの女たちの店先で今、カジユは「マクブの歯や目に触って」いる³⁴⁾。

このように、何か生き物が蠢く感覚、そして不意に発動する筋肉の反駁が、小説の随所に書き込まれているのである。「平和通り」はこうした傾向が極めて顕著な作品のひとつである。昆虫・魚・鳥といった様々な動物の生命感が、カジユやウタたちの動きを彩っている。特にウタは、高齢であるにも関わらず時に思わぬ瞬発力を見せる。カジユに話し掛けられたウタはいきなり彼を引き倒し、「静かに。兵隊ぬ来んど」と言いながら「信じられないくらい強い力」で押さえ付ける。自室の戸に打ち込まれた掛け金をねじ切って脱出し、夫妻に唾棄しようとしたカジユを突き飛ばすほどの勢いで迫る彼女の姿は、「白と銀の髪を振り乱した猿のような老女」と描写される。

こうした表現体系を一方に置いたとき、皇太子夫妻の描写は明らかに異質である。先にも引用した彼らの姿は、「鮮度の失われた鳥賊」に喩えられる³⁵⁾。あからさまに男根的なイメージをまとう天皇（とその息子）に冠せられた、去勢のイメージ³⁶⁾。万世一系の血統神話に不能を宣告するこの比喩はまた、彼らを生命感も筋肉ももたない軟体動物として描写することで、一連の語彙体系から隔絶する。「平和通り」は、皇太子夫妻を小説空間に取り込みながら、同時に排除して見せるのだ。

このことは、沖縄の言語空間に“触手”を伸ばそうとする皇太子への牽制の意味を持つ。「平和通り」に挿入された新聞記事にもあるように、皇太子は沖縄を離れる際の「おことば」で、「ぬちどうたから」——命こそ宝である——という琉歌を引用してみせる³⁷⁾。政治臭を抹消し、文学を媒介に沖縄へと侵入しようとするこの「おことば」は、「異例の談話」に続いて沖縄に向けられた親愛の表明とも取れよう。皇太子の沖縄文化に対する関心の深さについては、大城立裕も認めるところである³⁸⁾。

しかし、「ぬちどうたから」という文学的表現は、沖縄戦での流血の歴史を隠蔽してはじめて可能となる。新城郁夫は、「近代日本の言説は、沖縄を語ることで沖縄に関わる政治を消去し、その反作用において、「日本」といういかにわしい同一性を構築してきたのではなかったか」と述べ、その際に介在されるのが〈無知〉という認識論的暴力であると指摘している³⁹⁾。沖縄と献血にまつわる歴史・政治に対し無知の態度を取ることで、分断しつつ同化し支配する暴力は発動される。第二節で引用した秩父宮妃の言葉——「国民みんながござって献血」する社会形成の推進のために、皇太子は沖縄まで来た。血液を介した博愛の共同体として想像される「日本」へと沖縄を絡め取ろうとするとき、その一方で、近代日本と沖縄の植民地主義的歴史性は隠されてしまう。

だからこそ、「平和通り」は献血推進運動下の沖縄で皇太子らに立ち向かう者たちを描く。そのことは皇族を歓迎する住民との間に摩擦を生じさせもするが、戦争責任を自ら水に流し「命

こそ宝である」と言っている者を笑って迎え入れるだけの沖縄表象は否定して見せた。沖縄への一方的な表象をはね返すように、日本（文学）の中心／空白たる皇族を直写し書き返すこと。暴力的な警備に唾棄や弄便といった政治的行為が対応するならば、非政治的な姿勢を装う文化的侵入には言表の位相における抵抗が対応する。「平和通り」は、皇族を作中に招致すると同時に言語体系から隔絶することで、二重の抵抗を表現するのである。目取真俊の不敬表現は、文学を利用した天皇制の浸透や、歴史・政治を隠蔽することで都合のいい姿へと「沖縄」を形象化すると同時に自らの同一性を捏造しようとする力への抗いでもあるのだ。

結び——語りかける身体

目取真俊は、沖縄戦を体験していない世代が戦争体験をどのように考え、継承していくかを重要な課題に掲げている⁴⁰⁾。小説「平和通り」では、米軍の艦砲射撃に脅かされて山野を逃げ惑う中で息子を喪った、ウタの体験が描かれる。

沖縄戦下、ウタは四人の小さな子供を連れて、部落の人たちと一緒に洞窟に身を隠していた。防衛隊に駆り出された夫の消息は全くつかめない。洞窟から洞窟へと移動を繰り返す中で、生まれつき虚弱体質である上に腎臓病も患っていた長男義明は衰弱の一途を辿る。ウタは日増しにむくみが酷くなっていく義明の体に触れ、「石のような涙」を落としながらも、声を噛み殺して避難生活を続けざるを得ない。ある激しい雨の日、外から霧のように舞い込むしぶきがかかるにも関わらず、義明は洞窟の奥へと運ばれることを拒否した。

今日、なぜか義明は洞窟の入口の方で眠りたがった。二、三日前から身動きすることはおろか、声を出す元気さえなくなっていたのに、今朝はしきりに光の方に首を動かしているのに気付く、ウタは新鮮な空気を吸いたがっているのだ、と思った。他の人々の許しを得て、外から見えないように入口近くの岩陰に身を隠して義明を横にすると、むくみで鼻も詰まっているのか、魚のように口をパクパクさせて雨と木々の匂いのする外気をむさぼる。天井から一滴の滴が額に落ちた。生まれたばかりの雛鳥の目のように腫れ上がった頬に埋もれて、先だけ見えている睫毛がわずかに動いた。その時、ウタはやっと気付いた。この子は私の顔が見たかったのだ、と。母親の顔を見るために光が欲しかったのだ、と。だが、光を手に入れても、もう頬を開く力さえ失われていたのだ。ウタは涙をこらえて、張りつめた薄い皮膚を傷つけないように震える指先を懸命に抑え、人差し指と親指で義明の頬を開いてやった。目やににまみれ黄濁した白目の中に力無く光を放っている薄い茶色の瞳があった。義明の顔にかすかに笑みが浮かんだような気がして、ウタは俯す^{うつぶ}と冷えきった体に抱いた。義明が息を引きとったのは、それから一時間も経たない、雨上がりの陽が透明な光を放つ正午頃だった。

この体験談は作中現在においてウタの口から直接語られるのではなく、かつてこの話を聞いたフミによる回想によって読者に届けられる。ウタを敬愛して止まないフミは、ウタが話したこの体験を繰り返し思い出し、もはや自分の経験であるかのように捉えている。洞窟での出来

事を追体験しながら、フミは涙さえこぼす。フミが戦争体験者の言葉を通してその記憶と感情を身体化するまでに共有できているとしたら、ここには共感共苦を伴う継承の理想形があるのかもしれない。

しかし、「平和通り」はこれとは違った継承の回路も提示する。それは、ウタとカジユの関係に見出せるものである。カジユがウタから戦争体験を聞かされた様子は、小説からは伺えない。だが、カジユはウタの思いを誰よりも親密に読み取っている。カジユは、ウタの身に迫る暴力の源泉を見抜いた。カジユはウタと共に怒り、復讐を誓い、皇太子夫妻に照準する。また、皇太子らが沖縄を去ったあとには、ウタを山原^{やんぼる}へ連れて行こうとさえる。山原はウタが息子を喪った場所である。カジユは今も沖縄戦下を生きているウタに寄り添い、彼女とともに行動したり、彼女の行動を助け代行したりするのである。

「平和通り」において、祖母から孫へと沖縄戦を伝承する回路は、証言や資料ではなく、身体接触として示されている。カジユは兵隊に怯えるウタに押さえ付けられたり、背後から激しく突き飛ばされたり、ねじ釘で自分を傷付けたりすることを通して、彼女の奥底に宿る感情と、その基となった体験を受容している。

真新しいねじ釘は怒りに狂う動物の歯のように鋭く光っている。カジユは尖ったその先を自分の腕に突き刺し、縦に傷をつけた。熱く滾った憎しみが体から吹き出す。

ウタの部屋をふさいでいたねじ釘で自らを傷付けたカジユは、体内に充満していた憎しみに出会う。それはまた、ウタの奥底に眠っていた感情でもあるだろう。ここでカジユが流す血は、天皇の下で流通することを拒む。

小説冒頭で触角の折れた蟻に喩えられた弱々しいカジユだが、それはやがて鋭敏な触覚を示唆するイメージへと転換するはずだ。眠るウタの膨脝を撫でたカジユは、彼女の身体のもつ弾力が言葉そのものであることを発見しつつある。

萎びた肉のびれびれした弾力が、細かい鱗でもあるようにざらつく皮膚を通して何かを語りかけてくるようだった。

カジユはさらに、山原へ向かうバスの中で息絶えようとするウタに触れながら、世界観さえも変化させていく。自分が生きているこの時代、眼にしている風景が、まさに戦時下であるという視覚を、少年は獲得するのである。座席で夢から覚めたカジユは、窓の外の風景に出会う。そこに見えるのは、陽光が芝生に降り注ぎ、青年がジョギングをする光景である。

窓の外には、水々しい太陽の花粉が芝生の上に金色に降り注ぐ米軍基地が広がっている。金網に沿って植えられた夾竹桃の花が、白い蝶の群れのように風に揺れ、美しい。二の腕に彫った刺青をむき出しにして、赤ら顔の若い米兵が二人、ランニングしながらバスに手を振った。

芝生は金網の向こう、すなわち米軍基地に生えている。親密さをふりまきながらジョギングする青年は、半世紀に渡ってこの島を占領するアメリカ兵たちである。ここで描写される風景は登場人物の心情を象徴するようなものではない。戦争の終結などこれまでに無かったのだと、グロテスクなまでに馴染んだ穏やかな風景は告げるのである。

同時代の皇族を小説に召喚し、彼らに立ち向かう老女を描きながら、一見過激とも読まれかねない不敬行為の背後にある歴史と記憶の継承回路を探ること。小説「平和通り」はこうした試みを通じて、“平和通りと名付けられた街”⁴¹⁾のある現代に、今も戦後が訪れていない矛盾を突きつけている。

付記

「平和通りと名付けられた街を歩いて」の引用は初出雑誌に拠った。

本稿は、『日本比較文学会』第45回関西大会（2009年10月、於立命館大学）で行った口頭発表「目取真俊の不敬表現—報道・写真との比較から」を基に執筆された。

注

- 1) 選考委員の大城立裕は「人物の存在感」を、牧港篤三は「沖縄の置かれた状況と市場の場所設定」の成功を評価した（『新沖縄文学』1986年12月冬季号）。岡本恵徳は『現代文学にみる沖縄の自画像』（高文研、1996年6月）で、「庶民の間にある天皇制にかかわる感性のありかたに取材して、新たな問い直しを試みた唯一の作品」（p.261）であると位置付けた。
- 2) 沖縄文学全集編集委員会編『沖縄文学全集』（第9巻、国書刊行会、1990年9月）
- 3) 目取真俊『平和通りと名付けられた街を歩いて 目取真俊初期短編集』（影書房、2003年10月）
- 4) 渡部直己『不敬文学論序説』（太田出版、1999年7月）
- 5) 初の皇太子夫妻訪沖は1975年7月17日である。戦跡慰霊の塔巡拝、平和記念資料館視察、愛楽園訪問、沖縄国際海洋博覧会開会式臨席、同月19日に帰京という行程であった。翌年一月の閉会式にも出席しているため、正確には1983年は三度目の来沖であるが、「平和通り」では言及されていないため敢えて省略した。ちなみに、昭和天皇は皇太子時代の1921年3月、渡欧の途中に立ち寄ったことがあるものの、戦後ついに沖縄の地を踏むことはなかった。
- 6) 「皇太子暗殺企てる」（『沖縄タイムス』1975年7月1日）。なお、皇太子来沖を歓迎する声も決して小さくなかった。だが、火炎ビン事件に際し、「こんど皇太子に何かあったら、またヤマト（本土）に何をされるか分からない」と本土で暮らす子供たちの身を案ずる声や、「本土と沖縄の裂け目が広がりかねない」といった反応から、本土からの差別への「恐れ」も含めた住民の複雑な心境が伺える。（『朝日新聞』1975年7月17日夕刊、同18日）
- 7) 「精神障害者を強制収容」（『沖縄タイムス』1975年6月20日夕刊）
- 8) 警備車両を破損し、公務執行妨害で現行犯逮捕された川野純治は、最も警戒されていた沖縄解放同盟準備会の一員であった。川野は2010年9月に行われた沖縄県名護市議選に社民党の推薦で立候補し、米軍基地の移設反対を訴えて当選している。なお、ここで妨害された“公務”とは皇太子夫妻の護衛を指しており、皇太子夫妻による視察のことではなかった。その理由は本文後述の通り。
- 9) 「警備体制に汚点残す」（『沖縄タイムス』1975年7月18日）
- 10) 「火炎ビン取締法違反」はそのまま適用された。事件と裁判の詳細は、知念功『ひめゆりの怨念火』（インパクト出版会、1995年10月）を参照。
- 11) 「神経ピリピリの警備陣」（『沖縄タイムス』1983年7月7日）

- 12) 「参拝中に火災ビン」(『沖繩タイムス』1975年7月17日夕刊), 「参拝中, 火災ビン」(『毎日新聞』1975年7月18日) ほか。
- 13) 「火災びんに騒然 ひめゆりの塔」(『朝日新聞』1975年7月18日) など。ただし, 「火災びん」がイメージ・アップになった皇太子ご夫妻の「危険な賭け」(『週刊文春』1975年7月31日号) によると, この美談の発信源は東宮侍従である。
- 14) 「困惑の沖縄県民」(『毎日新聞』1975年7月17日)
- 15) 全文は『沖繩タイムス』(1975年7月18日) に掲載。
- 16) 「「過剰警備」と声明」(『琉球新報』1983年7月11日夕刊)
- 17) 「ハイビスカスばっさり」(『琉球新報』1983年7月11日夕刊), 「県の要請で臨時休業」(『琉球新報』1983年7月10日夕刊)。
- 18) 目取真俊『沖繩「戦後」ゼロ年』(NHK出版, 2005年7月, p.76)
- 19) 和歌は1960年9月12日からの第8回国際輸血学会に先立って発表された。内容は「見るがうちよみがへりゆく肌の色に ささげつる血のたふとさを思ふ」「数多き人の命をすくふべく 血しほいださなきそひたちつつ」というもの(『日本赤十字社社史稿』第7巻, 日本赤十字社, 1986年11月)。清水修が作曲し, 東京混声合唱団によるレコード「輸血といふことを(献血の歌)」も完成, 大会では地元コーラスによる合唱披露が恒例となった(日本赤十字社編『血液事業のあゆみ』日本赤十字社, 1991年8月)。
- 20) 「高血圧を献血奉公」(『朝日新聞』1944年2月21日)
- 21) 内藤良一「血液銀行・その15年間のあゆみ」(『週刊医学のあゆみ』26巻5号, 1958年7月)
- 22) 青木富貴子『731』(新潮社, 2005年8月)。ちなみに, こうした研究の先頭に立ったのは, 後のミドリ十字を設立する内藤良一ら七三一部隊の軍医たちである。戦時下の日本や海外での輸血事情については, ダグラス・スター『血液の歴史』(山下篤子訳, 河出書房新社, 1999年12月) も参照。
- 23) 『読売新聞』(1960年2月29日) の記事に, 「献血は, 無償で病める人びとのために血をささげることであり, 同胞愛にもとづく行為である。血液を商品のように売買することは, 名は“血液銀行”であっても, その実質は血のプロカーともいふべきであろう」とある。香西豊子が『流通する「人体」献体・献血・臓器提供の歴史』(勁草書房, 2007年7月) で指摘するように, 献血の「善意」には字面上的「倫理性」のほかにも「安全性」という論理が走っていた。
- 24) 前掲『日本赤十字社社史稿』p.402
- 25) 1963年に流通血液の97.5%を占めていた売血は, 1969年には完全消滅する。1973年に民間血液銀行の預血が無くなり, 1974年には献血が100%を達成する(前掲『血液事業のあゆみ』)。
- 26) 目取真俊は前掲『沖繩「戦後」ゼロ年』のpp.67-76で, 「平和通り」の基となった親戚のおばあさんの話を紹介している。
- 27) 海洋博に抗議する本土での運動では, 1975年7月12日に皇居坂下門外から皇居に強行侵入を試みた四人組の中に女性が一人いた。
- 28) 「愛の献血助け合い運動」月間中の1966年9月7日に, 陸宮夫妻, 秩父宮妃, 高松宮妃, 三笠宮内親王二名が「皇族献血」して話題になった。皇后や皇太子夫妻が献血したという記録は管見の限り見当たらない。
- 29) 前掲『不敬文学論序説』p.162
- 30) ウタの行為には, 火災ビン取締まり法違反はもちろん, 暴力行為等処罰に関する法律違反も, 傷害罪も適応できないだろう。公務執行妨害にあたるとしても, 彼女を「精神病患者」と規定したのは他でもない警備当局側である。
- 31) ウタが軟禁される部屋の暗闇は, 戦火で避難を余儀なくされ, 息子が絶命した洞窟とも重なる。火災ビン投擲者が潜んだのも, ひめゆりの塔脇の壕であった。ここはひめゆり学徒の, 皇軍の, そしてひめゆりの処女を彼らから守った娼婦たちの骨が残る場所でもある。桐山襲「聖なる夜 聖なる穴」(『文藝』1986年春季号) は, 「ひめゆりの塔事件」と, 洞穴に残響する声を題材にした小説である。

- 32) 目取真俊「剥離」（『週刊朝日別冊 小説トリッパー』1998年冬季号）では、被害妄想に取り憑かれた様子の妻が、夫に過激派のアジト摘発への協力を呼びかけるチラシを見せ、隣室から不審な物音がすると訴える。夫はこのチラシを眺めながら、「秋に県内で何かの全国大会があって、皇太子か誰かが訪れるという記事を目にしたのを思い出した」。代替わりしても、皇太子の来沖は、どこか人の不安や狂気を引き出す要因として捉えられている。
- 33) 西成彦・原毅彦編『複数の沖縄 ディアスポラから希望へ』（人文書院、2003年3月）
- 34) 初期作品には特にこうした表現が多く見られる。
- 35) 目取真俊による烏賊の比喩は、ほかにも「群蝶の木」（『週刊朝日別冊 小説トリッパー』2000年夏季号）で女性を慰み者にした日本軍将校にも用いられており、「日本軍の将校達の腐った白烏賊のような体」「腐った青白い体」という表現が確認できる。
- 36) 渡部直己は前掲書で、性と天皇を強く結びつける小説の不敬性に触れ、大江健三郎『われらの時代』（中央公論社、1959年7月）および「セプティーン」（『文学界』1961年1月号・2月号）などにおける、異常性愛の近傍へ天皇を招致する事例を論じている。小説「平和通り」の皇族直写における性との紐帯は、端的にインポテンツへと彼らを貶めることであろう。ちなみに大江の上記作品は、深沢七郎「風流夢譚」（『中央公論』1960年12月号）に発端する嶋中事件の渦中に発表された。この凶事および出版社の全面敗北が、敗戦後一旦開放された「天皇を描く小説」をめぐる状況を暗転させ、今日まで続く「菊のタブー」の要所になった。
- 37) 皇太子の言葉の全文は、「嚴重警戒の中、異例の全国大会」（『沖縄タイムス』1983年7月14日）に掲載されている。
- 38) 前掲「“火炎びん”がイメージ・アップになった皇太子ご夫妻の「危険な賭け」
- 39) 新城郁夫「「にっぽんを逆さに吊す」——来たるべき沖縄文学のために——」（『日本近代文学』第75集、2006年11月）。なお、目取真俊は前掲『沖縄「戦後」ゼロ年』でも、文化的な面で沖縄への親近感を強調する明仁の政治的役割に警戒を促している。
- 40) 前掲『沖縄「戦後」ゼロ年』p.20
- 41) 戦後旧那覇にかわって庶民の市場として形成された、国際通りから壺屋町へ通ずる約330メートルの通り。名称は1948年に公募で決定された（沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典』下巻、沖縄タイムス社、1983年5月）。

